

には「Nippon, Honshu: Mt. Kiyozumi, Prov. Awa (S.KUSANO, Jul. 28, 1928 - Type in Herb. Tokyo Bunridai)」とあります（小林 1938）。アンドンタケという品種が今後残るのかどうかは検討の余地があると思われますが、千葉県にとっては意義深いきのこのようです。ちなみにアカガタケの日本での初期の発見例は1927年7月3日武州高尾山、同年9月26日紀州で採集されており、前者は朝比奈泰彦、後者は南方熊楠という2人の巨人が同定したようです（川村 1933）。

アカガタケの記載は、命名者名のとおりイタリアの学者 P. A. Micheli（ミケーリ、1679-1737）により *Nova plantarum Genera* (1729年、植物の

新しい属) という、リンネ以前の隠花植物の分類学を代表する極めて著名な本に記載され、属もこの著書で *Clathrus* が採用されています。その図はとても美しい銅版画で、情報量がとても多く、裂開しない幼菌時の丸い子実体の表面にあらわれるサッカーボール様の模様まで表現されています。その後の欧州の図譜をみていくと、どうもこの図がその後長く西洋の図譜のネタ本となつたような雰囲気の、極めて完成された図です。

川村清一. 1933. かたけトあかかたけ. 植物学雑誌 5: 290-294.

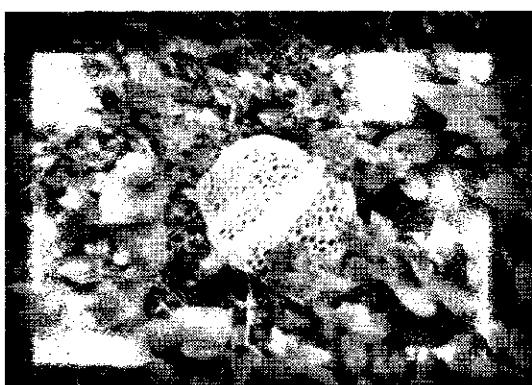
小林義雄. 1938. “大日本植物誌 ヒメノガスター亜目及スッポンタケ亜目.” 三省堂、東京.

## キヌガサタケ

林 芳緒美  
kaomi hayashi

10月14日、母が近所の奥さんたちと昼食の約束の話をしている時のこと。その中の1人の奥さんが「今日ね、あそこの竹藪のわきにキヌガサタケが生えてるのよ。珍しいきのこのなんですって。でも、臭いのよ。」と、言った。(私のうちのそばにはモウソウチク林があります) めずらしいものなら見に行こう、ということでその場にいた奥さんたち5人ほどで近所の竹藪まで見に行った。すると、まだマントの開ききっていないキヌガサタケが1本だけ生えていて、辺りにはキヌガサタケの臭いが広がっていたそうです。教えてくれた奥さんの話では去年もこの辺りに生えたということで、初めて見たときは気味の悪いものが生えていると思い、知人に聞いたところ、それはキヌガサタケといって食べれるきのこのだと教えてもらったそうです。でも、その臭いが気になって結局食べなかっただけです。(きのこの名前を教えてくれた人は料理方法とか教えてくれなかったみたいです) 生えかけのキヌガサタケを見た後、昼食に出かけ、また戻ってきたときにはマントが開ききっていたので、母が記念にと写真に撮りました。(写真参照)

その日は夕方から雨が降り出して、夜になって私が帰宅したときもまだ降り続いていました(母



から「キヌガサタケが生えているのよ」と教えてもらい、早速傘をさして見に行くと雨の中でも辺りには臭いが広がっていて、マントの一部が崩れてしまったキヌガサタケがありました。高さは20cm以上あり、私が見たことのあるきのこの中では大きい方で白くてとても美しい姿でした。吹春先生に調理方法を教えていただきましたが少し溶けかかったいましたし、1本しかなかつたので食べることは断念しました。

また来年も生えるかもしれないと思ったので、その時は是非マントが開いていく過程もみたいですし、食べられることを期待したいと思います。